



画廊に彫刻しかない。これだけで、現代美術では最大の褒め言葉になるであろう。インスタレーションやサイトスペシフィックなどどうでもいい。抽象や具象など問題にならない。彫刻が持つ特性である素材感、技法であるモデリングとカーヴィング、重力と台座の問題なども、この展覧会では無視される。ましてや色や形など、ここまでくればどうでもいい。彫刻が画廊にあるだけで成立する。

望月久也、三年振り二度目のステップス個展である。望月は二点の作品のみで勝負した。一点は写真手前の《顕潜・直》(泰山木/96×27×98cm/2017年)であり、大人なら一人で運ぶことが可能な重さだ。もう一点は奥の《顕潜・弦》(鉄/70×120×67cm/2017年)であり、望月によると約60kgあるという。しかし実際に見ると、その重さ=マスを強調することなく、素材の色を最大限に生かしてもいない。タイサンボクは木であると分かるが、鉄はもしかしたら木材を着色したのかも知れないと考えることもできる。つまり、素材を生かしているわけではないのだ。それは、各々

の形からも伺える。横から見れば、正三角形が連なっているだけである。木でなければ、鉄でなければできないことでは決していない。相当の技法が必要だが、技術に溺れていない。色、形、技法を焦点としていないのだ。

二つの作品の関連性はどうか。《顕潜・弦》の背後に立ってみるとチューリップに見えなくもないが、写真のように《顕潜・直》の側から見れば、具体的な何者にも見えない。しかし二つの作品は、決して単独に存在しているわけではなく、微妙な距離と関係を保っている。それは何だろうと考えてみれば、「顕潜」という作品名にヒントがあるのかとwebで調べると、「顕潜」という語彙はなく、「日本遺伝学会は、遺伝子に優劣があるという誤解や偏見を生む恐れがあるため、遺伝子の特徴の表れやすさを示す「優性」「劣性」を、それぞれ「顕性(けんせい)」「潜性(せんせい)」に改めると決めた」(2017年9月25日)と出てくる。私は望月の次の作品に対する考察では、遺伝子と「顕性/潜性」を視野に入れなければならなくなった。